

札幌観劇記（独断と偏愛の「2015アワード」）

加藤浩嗣（北海道新聞記者）

二〇一四年一〇月末から一二月末まで、丸二カ月間入院したヘルペス脳炎という奇病は完治したが、なにぶん体調全般が思わしくなく、劇場を飛び回ることができないままに終わってしまった二〇一五年だった。

ただ年の半ばから新たに同年代で異性の観劇仲間と知り合い、男性だけの目ではない演劇の見方に触れ始めて新鮮な面白みを再認識したところである。

心新たに二〇一六年を健康第一で観劇生活を続けよう。

「独断と偏愛に満ちた」「2015アワード」を発表する。

観劇数は八八本（同一作品の複数回観劇を含む）。一四年より八本増えた。二一世紀になって始まった二年連続の一〇〇本割れは残念だが、一六年に克服すべき課題としたい。

観劇日の順に挙げていく。なお今回は観劇数が少ないうえに、きちんと分析したり原稿を書くための準備をしていなかったりしたので、手帳を見ながら思い出しつつ書く。しかもシアターホリック「奨励賞」ならびに、道外カンパニーの道内公演賞の選考は見送った。原作者な

どに誤記があるかもしれない。まったくもって、いい加減ですみません。

◇シアターホリック「マイベスト」

▽劇団パーソンス「くそつたれアイラヴユー」（脚本：演出 畠山由貴、観劇月一二月、札幌・ターミナルプラザことにパトス）。ソープランドだったか、風俗店で働く女性たちの待機室が舞台。かつての劇団イナダ組「亀屋ミュージック劇場（ホール）」と彼らと思われるかもしれないが、風俗店で働く女性へのシンパシー一つとて、も女性作家ならではの観察者にとどまらない視点で、趣は大きく違う。それぞれに特色があり、面白い。その場を持って行ける怪優・棚田満に引きずられることなく、逆に彼の魅力を存分に引き出したのも手柄と言えるだろう。彼と阿部星来の言葉のほとんどない「会話」に胸を突かれる。畠山は一作ごとに成長が著しい。公私ともに充実して一六年はいつその飛躍に期待する。

▽札幌座「大海原で」（作スワボミール・ムロジェツク、演出弦巻啓太、一二月、札幌・シアターZOO）。劇場

の真ん中に置かれたゆらゆら揺れる小さな筏の中でのドタバタ（主人公三人は沈没客船の乗客との設定）が、逆に大きな世界（外界）への広がり想像させた。これまでは、ちよつとあざといとも感じられた町田誠也の演技がすつと自然に入つて来たのが、私にはなにより大きな収穫だ。札幌座Pierという小規模芝居の再演の仕組みにかけて、さまざまな俳優を起用して再演を重ねるにおあつらえのいい演目だと思ふ。ぜひご一考を。

◇シアターホリック「殿堂入り」（再演作品対象）

▽札幌座「デイヴィッド・コパフィールド」（原作ディケンズ、構成・演出清水友陽、一月、札幌・サンピアザ劇場）。舞台中央に加え、前に出つ張つた左右の出舞台を有効に生かして時間と空間の違いを巧みに見せた。大河ドラマが大河ドラマとして壮大に確実に圧倒的に胸に迫る。かつて見て感動したなにかの舞台を思い出す。そうか、清水の仕事は戯曲ではない「デピコパ」同様、カフカの一連の小説作品を構成・演出した松本修さん（MODE主宰。札幌市出身）の仕事に似ている。とてもいい、貴重で大切な仕事だ。この豊かで芳醇で贅沢なつくり、プロセスを重視するつくりを今後もぜひとも大切に。

▽ハムプロジェクト「幕末サムライヌード」（脚本・演出すがの公、一二月、シアターZOO）。私は初見なのだが、初演からいろいろ進化しているらしい。とにかく役者の体がよく動くこと！ 群舞や殺陣に冴えがあり見応えがある。若い役者たちのほとぼしるエネルギーがまぶしい。ハム芝居独特のしつこさ執拗さが、この芝居で

は良い方に出ていた。

◇シアターホリック「北海道演劇の宝」賞（二〇〇九年に劇団北芸Ⅱ釧路市Ⅱ「この道はいつか来た道」のために特設した最高賞）

▽劇団千年王國「ローザ・ルクセンブルク」（作・演出橋口幸絵Ⅱ名字はもしかしたらもうご主人と一緒の櫻井だったかもしれない。作曲・馬頭琴演奏・喉歌嵯峨治彦、二月、サンピアザ劇場、二〇一三年初演時選定済み）。のみ込まれて快感のけれんみたっぷり。劇場いつばいを使って五感に訴えてくるダイナミックなダンスと歌の数々、見事。ローザの加齢とともにバトンタッチしてそれぞれに心を揺さぶる坂本祐以、堤沙織、榮田佳子、村上水緒の確かな演技。もちろん、骨太ながら時に繊細な橋口演出の真骨頂が楽しめること請け合いだ。千年は、そして橋口はこの作品をもって、一つの光輝く地点に到達したのではないか。個人的に希望がある。なにか、つてがあるのなら、東京・三軒茶屋のシアターラムで上演していただけないか。首都の目の肥えた演劇愛好家うならせることは間違いない。私にできることがあれば、なんでもして差し上げたいのだが……。この作品とい「デピコパ」といい、サンピアザ劇場は群像劇におあつらえの小屋なのだろうか。それともここで傑作群像劇が生まれるのは、ただの偶然だろうか。

▽実験演劇集団「風蝕異人街」の「青森県のせむし男」
〜肉の墓を背負つて闇を歩く〜（作寺山修司Ⅱ寺山が主宰した劇団「天井桟敷」の一九六七年旗揚げ公演作品、

演出・潤色こしばきこう、八月、シアターZOO)。大正家に仕えていたマツ（堀紀代美）の産んだ赤子は背中に墓石を背負ったようなせむし（三木美智代）であった。母と子の怨念、生まれてきたこと自体の哀しさ。男と女の性の情念の世界（以上、チラシより）。すべてを説明しすぎずに身体で魅せ、見る側の「想像力＝創造力」を刺激してやまない。見る側の「思いの入り込む余地」が、説明しがりのこしばとしては（笑）十二分に担保されているのである。「かっこ」内は、素晴らしい作品をたてる際の私の常套文句）。演奏はジャンベ・石橋俊一、薩摩琵琶・黒田拓、二胡・凜子。この三者がまたすばらしい。変に遠慮してして出て役者陣に合わせるのではなく、堂々と主張してこそ演技、ひいては作品全体を引き立たせている。映画なら小樽出身の名匠・故小林正樹監督「怪談」（一九六四年、原作小泉八雲）での音楽担当、故・武満徹を彷彿とさせる仕事ぶりだ。圧巻、圧倒的なのである。

▽イレブンナインブレゼンツ dEBoo（イレブンナイン内において小島達子がプロデュースする企画）「二人の怒れる男」（作レジナルド・ローズ、訳額田やえ子、演出納谷真大、八月、札幌・コンカリーニョ、二〇一四年初演時選定済み）。初演から配役を少し変え、納谷の演出もいっそうタイトになり、なおクオリティーがぐんと高まった。プロデューサー小島達子の品質をゆるがせにしない意志に敬服。ありがとう、達ちゃん！
二〇一六年もすてきな芝居をよろしくね！

▽札幌座Pit「ブレームンの自由」（作ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー）一九七一年初演、翻訳渋谷哲也、演出弦巻啓太、音楽斎藤歩。歌詞は戯曲にある、八月、シアターZOO、二〇一三年初演時選定済み）。初演から替わった年長者がさすがのいい持ち味を出した。初演に引き続き毒殺魔ゲーシー役の宮田圭子。これほど魅惑的な悪女が板につくとは、たいへんに失礼ながら私の想定外であった。この役柄にこの役者という存在を見られただけで、北海道演劇の宝なのである。

◇個人賞 目をつぶって、ぱつと思ひ浮かんだのが坂本祐以（劇団千年王國）。札幌座「ルル」でもいい仕事をした。二〇一六年はもっともつと光輝くだろう。

札幌演劇シーズンが始まって今年は五年目。

札幌演劇界は、一月の札幌劇場祭、冬・夏の札幌演劇シーズンという車の両輪が、ようやく演劇には縁のなかった人にも浸透し始めたといったところではないか。賞レースⅡ一発狙いの劇場祭、そこで選に漏れても芝居の目利きが厳選した「よい舞台」を見ていただこうとすくう再演傑作揃いの演劇シーズン。そうしたイベントの役割分担も的確に軌道に乗りつつあるように思う。私も微力ながら演劇ファンの一人として、札幌、北海道の舞台芸術振興の一端を担っていく所存だ。今年もどうぞ劇評ブログ「シアターホリック（演劇病）」をくれぐれもご贖員に！